

# 主体美術

## SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。  
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の  
集団として積極的に活動していきたいと思えます。  
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本  
に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局  
〒302-0001  
茨城県取手市小文間4401-1  
福田玲子 方 TEL / FAX 0297(85)6665



寺田政明  
「形態・飛翔」1937年

## 「つれづれ」

福田玲子

アトリエの片隅にはDMの入った段ボールの箱がいくつも積み上げられ、大判の平たい段ボールには第56回主体展のポスターがくるまれたまま置いてある。それを見るたびに思い返している。

昨年、55回記念展が終わって考えることが多々あった。開かれた団体展である主体展の主体らしさをアピールしていくための強いキャッチを考えよう。公募展でありながらそれを超えた独自の新しいイメージを連想する言葉「脱 公募団体」が考えられた。それを掲げて56回展のチラシと応募要項はこれまでのスタイルから一新してチラシ兼応募要項をパンフとして作成した。8,500枚のパンフは例年より2カ月早く出来上がり、2月初めに出品者、美術大学、専門学校、画材店、美術関係者に発送し、3月、4月に開催される中部展、関西展、武蔵野展、神奈川展へも配布することが出来た。いつもなら4月発送だったものを大学などの学期末までに合わせて早期に広報することでその成果を狙う意図でもあった。

ところが3月になるとこれまで想像もしていなかった新型コロナウイルスの出現で瞬間に状況は変化していった。沢山の感染者が出る中でいつ終息するかもわからない未知の感染症が何もかもを狂わせていった。3月、4月に開催予定の他団体の展覧会が次々と中止を知らせてくる中で緊急事態宣言が出され、美術館もやむなく閉館になった。

主体では2月11日の会計監査が終わって、これからという時に3月1日の例会も22日の拡大事務局会議も4月19日の事務局会議ではポスターとDMを発送する予定でいたがそれも出来ない状態になった。これで9月の主体展は本当に出来るのだろうかとか誰もが思い始めた。展覧会委員会ではこうした事態を受け止めて、5月4日に初めてのオンラインのリモート会議で話し合うことになった。そしてコロナの禍中で会員はじめ出品者の仲間は今何を思っているのかをはがきて「今の声」としてその思いを伝えてもらうことになった。

6月の初めまでに届いたはがきは150通となったが、5月中に届いた130通については事務局と展覧会委員会のメンバーにはそのまま書き写したものを毎日メールで配信し続けた。状況を共有して今後を共に考えたかった。

はがきには「不安の中でも自粛生活の中で絵があってよかった。開催出来たら嬉しい。」というメッセージがたくさん寄せられたが、一方では「命にかか

わる問題でもありこういう時に開催するのは反対だ。」という意見もあり、参加すること自体を止める会員も出ていた。

地方在住の会員からは作品は描いているが、上京は家族の反対もあり無理であることを知らせてくるものもあった。それでもアートの持つちからを信じてがんばって開催しようという意気込みを持つ人と、コロナの現状に不安を抱く人、誰もが揺れていたと思う。

事務局も開催に対して様々な懸念を出し合いメールを通して何度も話し合った。会員全体が高齢に近いこと、開催する側、またそれを見に来る人たちの安全を守るのか。美術館のガイドラインに沿った対策をどうとるかなど、意見交換を何度もした。開催か、否か、巡回展の京都、名古屋でも答えを探していた。毎日流れてくる感染症のニュースに敏感になりながら、主体はどう行動するべきか、経験したことがないことへの答えが見つからずじまにいた。

6月、緊急事態宣言が解かれて人々が日常を取り戻したかのように動き始めた。主体開催の9月が迫ってくる。6月中には結論を出さなければ、これ以上は引き延ばせない。6月28日には例会が予定されている。どれだけの会員が集まってきてくれるかはわからないにしても、顔を合わせて話し合いをすることが今、最も大切なことに思われた。安全対策をして30人の会員が赤羽会館第2集会室に集まった。窓を開け放し、席を空けて。新会員も数人参加してくれた。そこで議論をし、話し合った。

そして私たちは、2020年の第56回主体展は2021年9月に延期しようとした決めた。

やりたい気持ちは誰にもあった。しかし今地方からの会員が参加できない、高齢の会員が出て来られない、審査や役割がほとんど果たせない状況で、一部の会員だけでやるのが主体にとってどれだけ意味のあることなのか。主体は全会員で公平な審査をし、自由に発言し、揃って展示作業をし、運営する開かれた美術家集団なのだ。今年掲げた「脱 公募団体」それこそが仲間を尊重し思いやりの豊かなヒューマニズムの精神から生れた言葉なのだ。

積み上げられたDMの入った段ボール箱、私はすぐには捨てない。捨てられない。来年新しい2021年第56回主体展のポスターとDMが出来てくる時まで。

## 2020.8 No.107 CONTENTS

- 1p 巻頭言 ……………福田玲子  
2~6p 特集「素描のちから」  
「寺田政明さんの素描」……………藤田 俊哉  
「この素描をみよ!」……………オノ・ミチヒロ  
「ドガの教え」……………吉田 正  
「素描について」……………黒川 洋  
「日々のスケッチ」……………森 伊津子  
「美大生の素描」……………落合 梨乃  
「素描家というもの」……………山田 礼二  
7p 田中朝庸さんを悼む……………岩井 啓二  
植田寛治さんを悼む……………榎本香菜子

### ART WAVE

- 8~9p ●アトリエ訪問  
有馬久二さんのアトリエ……………齋藤 典久  
故 植田寛治さんのアトリエ……………山崎 弘  
10~11p ●各地の美術展から  
武蔵野作家展…桑原 雄一  
神奈川作家展…黒川 洋  
中部作家展…水谷 幸子  
関西作家展…岡本 裕介  
12p インフォメーション  
展覧会記録  
編集後記・その他

# 特集 「素描のちから」

素描とは何か…?これは古今東西の画家にとって本質的な問いかけである。

ある人は「他人に見せる類いのものじゃ無い」といい、またある人は「素描こそが画家を雄弁に物語る」という。

人が描くという行為のうち、もっともダイレクトな成果でもある。そして素描は確かに魅力的だ。

この特集『素描のちから』は当初、第56回展主体展の特別展示に連動して準備した。

残念ながら2020年の展覧会はなくなってしまったが、主体会員の素描に関する考察を機関紙上ではお届けしたい。

## 「寺田政明さんの素描」

藤田 俊哉

ここに一冊の画集がある。

「寺田政明素描集」これを手掛かりに、思いつくままに書いてみよう。

昭和60年発行のこの大判素描集には昭和初期から発行時までの長い年月の素描作品が収められている。

1933年、最初期の「昆虫の脚・かまきり」は細いペンによる細密な点描風のタッチで、どこかシュールレアリズムを思わせる。しかし同年の「桌上的静物」では打って変わって墨と筆による豪快なタッチで対象をざっくり捉えている。

また1937年のペンによる「形態・飛翔」は軽やかなタッチの線描で鳥のイメージが記号的に描かれ、対して1944年の「吠える」では空に向かって吠える犬の姿がコンテとペンを擦り付けるようなタッチで黒々と重く表現される。

実に多様な表現である。ここには自分の表現を探る若い画家の姿がはっきりと見てとれる。そしてスタイルの異なるそれらの素描はどれもなかなか魅力的だ。

寺田さんの素描には生涯を通していくつかの作風があるようだ。裸婦や肖像画、動植物や風景画、静物画とモチーフはいろいろ。自然主義的なタッチのもの。素朴なもの、幻想的なもの。表現主義的なもの、抽象的な素描もある。

しかし、これといったひとつの「寺田政明」画風には収まっていないように思う。

通底しているのは力強さとエネルギー、そしてどれも「画家が実際に目にしたものの、その時々で感じたものを描いている」ことか。

『「素描」はもう一人の自分であり日記のようなものでそのがなく恥ずかしい限りですが…』と画集あとがきに本人の言葉がある。日々、日記のように絵を描くこと…なるほど、確かにどれも生々しい呼吸を感じて、小綺麗に整えた感じがしない。

しかし、そこが大切なのだ。

人さまに見せるためとか、作品として発表しようとか、それは二の次。自分が興味を惹かれたものを直感の趣くままに描いて、自分の眼と手で確かめる。

理屈はあとでついてくる。それが絵描きだ。

なんてカッコいいんだ、と気がついた。画家の剥き出しの精神を表すもの。それこそが素描の真髄ではないかと思うのだ。

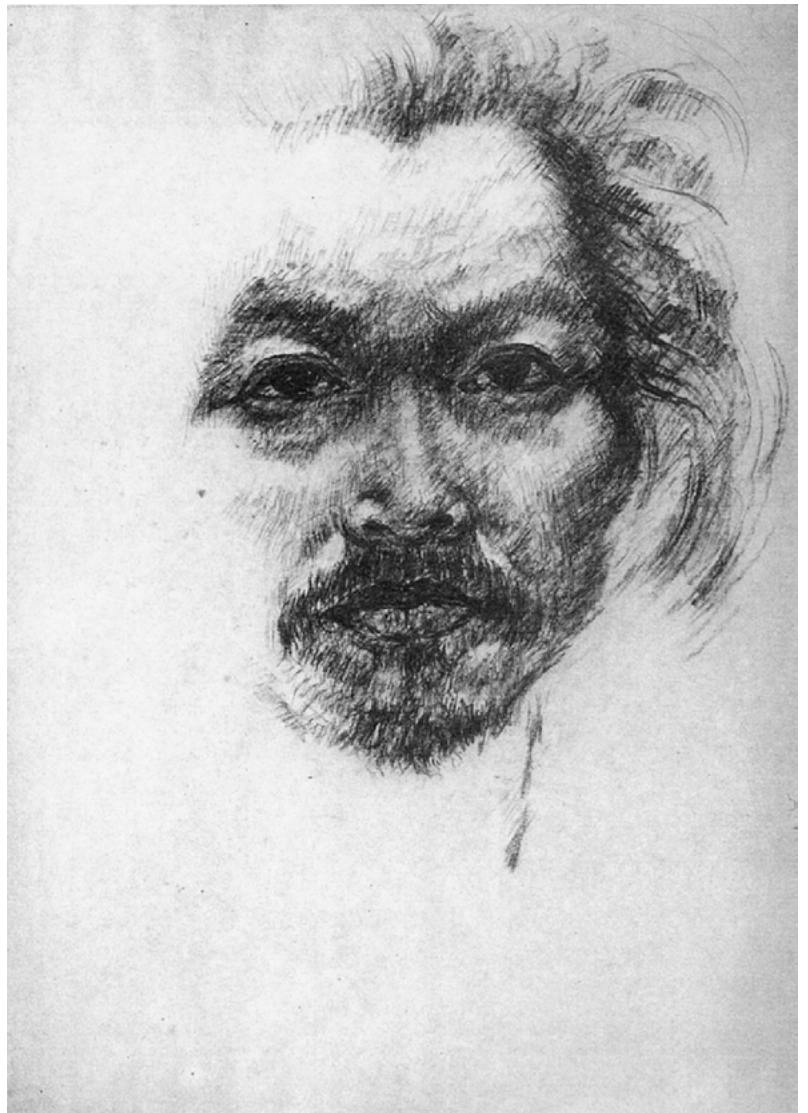
1945年、33歳の寺田さんが描いた鉛筆による自画像がある。ハッチングを重ねた古典的タッチで描き出された顔は重厚で、私はレンブラントの自画像を連想した。虚空を見据える眼が印象的だ。終戦の年、新しい時代に向かって生きていこうとする画家の眼差しがここにある。

2020年の今年、世界はコロナウィルス蔓延で一変した。感染の収まらぬ現在、我々はこれまでの日常と違う「新しい生活様式」を生きていかなければならないと言われて

いる。「Withコロナ」の未来をどう人間らしく生きていけばよいのか。画家はこの世界にどう向き合い、何を発信できるのか?

今から75年前、戦後の混迷と激動の時代に希望を見出そうとする寺田さんの魂は、素描という形となって時を経た現代の我々の胸にも響く。

主体美術の大先輩を皮切りに、素描の魅力について改めて考えてみたい。



▲寺田政明「自画像」1945年

# 「この素描をみよ！」

オノ・ミチ・ヒロ

大学時代、友人が当時発売されたばかりの「世界素描大系」全4巻を買って見せてくれました。定価128,000円。分割払いでの購入と記憶しています。過去の偉大な作家の素描に学ぶ姿勢と、値段が高額なこと両方に驚いたものでした。今ではずいぶん安く手に入るので、私の本棚にも3冊は並んでいます。残り1冊もそのうちネットオークションで安く買うつもりです。今回のテーマをうけて、あらためて画集を見直してみました。いろいろな素描を見ると、どうしてもレオナルド・ダ・ヴィンチに行き着きます。もう少し意外性のある人を選びたかったのですが、レオナルドを見てしまうと、もう他の人は選べません。

以前、インクジェットプリンターでレオナルドの素描を2点原寸大でプリントアウトして、今も飾っています。ネット上で探すと画像のデータが多数みつかります。その中から解像度が高いものを、大きさを合わせて印刷しましたが、画像ごとに色味がみな違い、どれが一番オリジナルに近いのか悩んでしまいます。そのときは黒っぽい線でプリントしましたが、描画材が赤チョークでもっと赤茶色の線がオリジナルに近かったようです。原寸大のポスター「ほつれ髪の女(ラ・スカピリアータ)」もいっしょに飾っているのですが、この素描について書こうと思ったのですが、なんと材質が「ポプラ板に油彩」…素描ではありませんでした。

迷った末、やはり本物を見たことのある素描について書きます。3年前に三菱一号館美術館「レオナルド×ミケランジェロ展」にあった、レオナルド・ダ・ヴィンチ「少女の肖像／〈岩窟の聖母〉の天使のための習作」(1483～85年頃、トリノ王立図書館)について。技法は金属尖筆、鉛白によるハイライト。明るい黄褐色に地塗りした紙。サイズ181×159mm。「金属尖筆」…、使ったことありません。メタルポイントのことで、代表的なのは銀筆(シルバーポイント)。描いたときは灰色で時間経過とともに褐色になるそうです。硬めの鉛筆のような書き味で、描いたら消すことはできません。鉛筆誕生以前の描画材です。

レオナルドの絵画の特徴の一つは鉛筆の跡を残さないこと。膨大な時間をかけて描いたと言われていました。しかし素描はハッチングが使われ、

1本1本の線を克明に追うことができ、作者の手の動きを感じることができません。顔には繊細な陰影がつけられていますが、顔の輪郭やそのまわりはわずかな線で描かれ、一段と線の美しさが引き立ちます。レオナルドがどのぐらいの時間をかけてこの素描を描いたのかはわかりませんが、何十分とか長くても1時間という単位でしょう。作品制作の中で、時間をしっかりかけると、偶然の積み重ねの中でひょっとすると傑作が描けるかも、と思ってしまうことがあります。しかし短い時間で描かれたこの「凄い」素描を前にしてしまうと、もう「凄すぎる」ぐらいしか言葉が出てきません。

弟子や後世の画家が数限りなく模写したとおもわれますが、描かれた女性の美しさや気品を描き表せたでしょうか。美しい顔の素描の模写には何度も挑戦しましたが、似せることはできても、その美しさや気品は、ほんのわずかな違いでいつも消え失せてしまいました。

こんな文を書いていたら、飾ってあった別の「美しい顔」が目にとまりました。主体美術の先輩、故 倉石隆 氏のリトグラフです。(題名「少女」?)版画ですがリトクレヨンかリトペンシルで描かれていて、素描の持ち味がよく再現されています。レオナルドの素描をプリントアウトして並べてみました。だいたい同じ大きさです。はるか昔から「美」や「女性の美しさ」を追求してきた作者の眼を感じます。素描ならではの手や指づかいも伝わってきます。

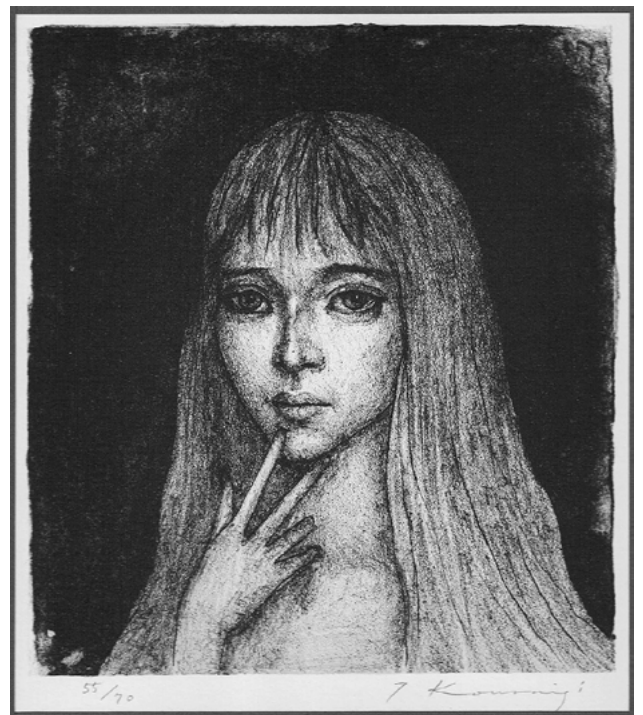
そこに普遍的「美」の追求への共感を覚えながら、最近の「美人画」ブームについても考えてしまいます。私がレオナルドや倉石氏の素描に惹かれるのは、きっと「女性の美」のさらにその奥に、「人間」についての深い洞察があるからではないのかとも考えるのですが、今多く紹介される「魅力的な美人画」にも幻惑される自分があります。

「この素描をみよ」。「もっとよくみよ」。

自分の眼で、もっと「本質的」というか「不易流行」というか「永遠性」というかよくわからないのですが、大事なものを素描の中にしっかりみていかないと、と強く思いこの文を書きました。



▲レオナルド・ダ・ヴィンチ「少女の肖像／〈岩窟の聖母〉の天使のための習作」



▲倉石 隆「少女」リトグラフ

# 「ドガの教え」

吉田 正

描くという行為は、現存するショーヴェ洞窟やアルタミラ、ラスコーの壁画からも明らかのように、人類誕生と共に行われている。素描という概念は未だ存在していなかったと思うが、形を把握し、更に生命力を吹き込み、また一方では、文字や『○△□』のようにかたちを単純化しようとするなど、当時の人間の造形能力(脳細胞)には驚かされる。描くという行為は、先史時代では美しい形を追求するというよりも、むしろ世を越えて何かを伝達するミームのような本能的な欲求であったに違いない。

素描が意識され始めたのは、ギリシャ美術以降であろうか。絵画や彫刻などの写実的な表現作品の傍らには常に素描の存在が感じられる。漆喰の壁画のように画を動かすことが難しく、綿密な素描が必要とされていた宗教画の時代から、ルネサンス時代のミケランジェロやレオナルド・ダ・ヴィンチを経て、支持体も板からキャンパスへと変化してきた。現場主義に重きが置かれた印象派時代に至っては、室内で時間をかけて下描きをするという制作スタイルは薄れ、素早く描けるパステルや水彩絵の具なども多く使われ始め、素描のあり方自体、時代や作家と共に様々に変化してきたように感じる。20世紀以降にはドローイングの表現性が注目され、素描が作品としても確立している。

自分の素描についてあまり意識したことはないが、振り返ってみると、本格的に美術の道を志すようになった美大受験期に辿り着く。ひたすら自分と闘っていた時代に読んだ、『ドガに就て』ポール・ヴァレリイ著(吉田健一訳)筑摩書房が、今でも強く自分に根付いている。素描を「形式の見方」とするドガの言葉を金科玉条としてデッサンに打ち込ん

でいた当時の私は、制作と真摯に向かい合うドガの姿勢と、自分に厳しく人に優しいというドガの生き方にも憧れていた。

素描は私にとって、対象を眼で観て、心で感じる、想像力の源である。観察や分析、構想などのエスキース的な意味合いが強く、自分の引き出しを増やす行為である。同時に、タブローを描くために、本質を求めてそれを削ぎ落としていく行為でもある。鉛筆や水彩はもちろん、時には言葉として文字に起こし、写真やパソコンまでも道具として使用することもあり、決してモノクロームに限定されたものでもない。時間が無い時でも、形についてはできるかぎり現場で描き留めるようにしているが、形容しがたい色と出会った時は、絵の具よりもデジタルカメラに収めることを優先させて、後日色の記憶を蘇らせる。紙に描いたエスキースは、消せば無くなるが、パソコンで描いたエスキースは、いくら消しても、時系列でデータとして残り、後戻りもできる。これらも今の時代に生きている自分の素描である。

『ドガにとって一つの作品は、無数の下絵と、それから又逐次的に行った計算との結果である。』ポール・ヴァレリイ

素描は作品が完成するまでの過程において存在するものに過ぎず、時間とともにキャンパスの中に追加されては消され、また加筆されるものであり、それ自体を人目に晒すものではない。重要なのは、素描を通して行われる観察や探究、精神性の確立など行為そのものであると感じる。古臭いかもしれないが、素描は表現作品ではなく、人の心を動かそうと洞察する作家の眼力であると考えている。



▲ラスコーの壁画



▲エドガールドガ 「少女のデッサン」



▲エドガールドガ 「バレエのレッスン」

# 「素描について」

黒川 洋

素描を見るのが好きである。展覧会でも素描のコーナーがあると楽しくて、結構長い時間を過ごしてしまうことがある。

「素描」と言われて私が思い浮かべるのは、「作家が心を動かされて無心に描いたもの」であり、人に見せることなど考えていないものなのだと思う。化粧をしていない素の顔とでも言うのだろうか。作家のありのままがそこにある。

しかし、よくよく考えてみると「素描」には、「作家が心を動かされて無心に描いたもの」、以外にも「作品のイメージを模索して試行錯誤を繰り返したもの」や、「作品として見られることを想定して描かれたもの」も含まれるのだろう。

無心になって描いた素描には、作家の興味や関心や心の震えが詰まっているし、試行錯誤の素描には表現への苦しみや汗が滲んでいるし、作品を意識した素描には作家の芸術観が現れているであろう。

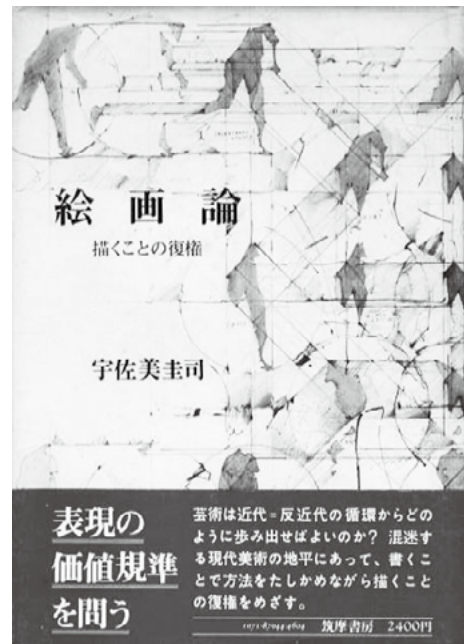
そう考えると素描は、作家が何を考え、何に興味を抱いたのか、何をどのように観たのか解るから興味深いのだと思う。そんな作家の息づかいが感じられるから、素描を見るのが好きなのだと思う。

素描について心に残っている言葉がある。

ひとつは、奥村土牛が写生について語ったひたむきな言葉。

「写生と言っても外面的な写生ではあきたらないと思っている。そのものの物質感、詰り気持ちを捉えることに私は腐心している。言うまでもなく、写生の様な写生では困ると思う。一本の線をひくにも、そのものの真髄を掴む様な線をひきたいと思う。然しながらむずかしく、私など未だ思うだけでどうかその域に達したいと思っている。」

もうひとつは、昔、宇佐美圭司の「絵画論」を読んだ時に、セミナーに参加した現代画家志望の学生たちが、港の風景を前にして、スケッチブックを脇に抱えたまま何も描かずに立ち尽くしている光景が語られていて強く印象に残った。当時、目の前にあるものを描くことに何の疑問も持っていなかった私には、それは驚きであったが、そこに絵画の終わりを感じるのか、絵画の可能性を感じるのか、その捉え方自体にも作家の



考え方が現れるのだろう。

同書の「あとがき」に次のような文章があるが、私は美しい素描を思い浮かべた。

「何を描くのかという確かな目的もなく、私は線で落書きをすることがある。紙にインクがしみこんでいくのを見守りながら手を移動させると、線はインクののにじみの度合いを反映して、太くまた細く私の手の下にためらいながら誕生する。ためらっているのは私の手だ。しかし、線はためらいをあらわしながら太く細くふるえる肉体となって、自らの生命を生き始めるだろう。」

\*「奥村土牛作品集」山種美術館、「絵画論」宇佐美圭司著 筑摩書房 引用

# 「日々のスケッチ」

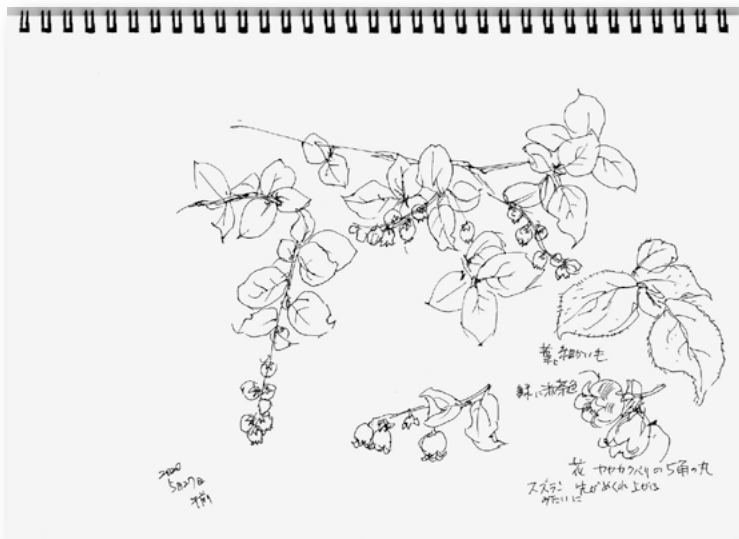
森 伊津子

絵の仲間に野線のない手帳をいつも持ち歩く人がいます。気に入った風景に出会ったら直ぐにスケッチするそうで、どのページも小さいながら一枚の作品に仕上がっています。私も真似て小さいスケッチブックを何度も買ってみますが上手いきません。展覧会に発表する大きな絵は配置を慎重に考え画面を作りますが、素描はノートの隅の落書きみたいに無雑作で一枚の絵にならないことが多いです。アトリエの隅には黄ばんだクロッキー帳やスケッチブックが何冊も積んであります。整理対象物です。どれも作品として壁に飾るとか発表する目的ではない素描ですが、飽きもせず増えていきます。そもそも紙と鉛筆があると絵を描いてしまうのは何故でしょうか。

この春、外出自粛の号令の下、東海自然歩道沿いの県有林「昭和の森」を平日の雨天以外ほぼ毎日散歩することが新しい習慣になりました。私は海のそばで育ちました。山で遊んだ経験が少ないので樹木や山菜について知らないことが沢山あります。新芽の形と成長の様子、小さなつぼみが膨らむ期待感、花が咲いて初めて解る木の名前、毛虫の種類等々。スマホは持っておらず、この頃はメモ帳にスケッチし、帰宅後図鑑などで名前、かぶれの危険、食べて良いかなども調べています。相手を良く理解できた気がします。私達の回りには沢山のものが存在しますが、自分の目に留まり、よく観察し、スケッチすることで、深く理解し、記憶し、正式に自分の生活空間の一員になるのだと思います。私の描く

絵は自分の身の回りで起こる小さな出来事に由来します。モチーフの描写が基本ですが、イメージを画面上に具象化するとき過去のスケッチによる記憶たちが無意識のうちに表れているかもしれません。

スケッチの意義をあれこれ語りたいところですが、ただ絵を描くことが好きでかかなくとも思います。



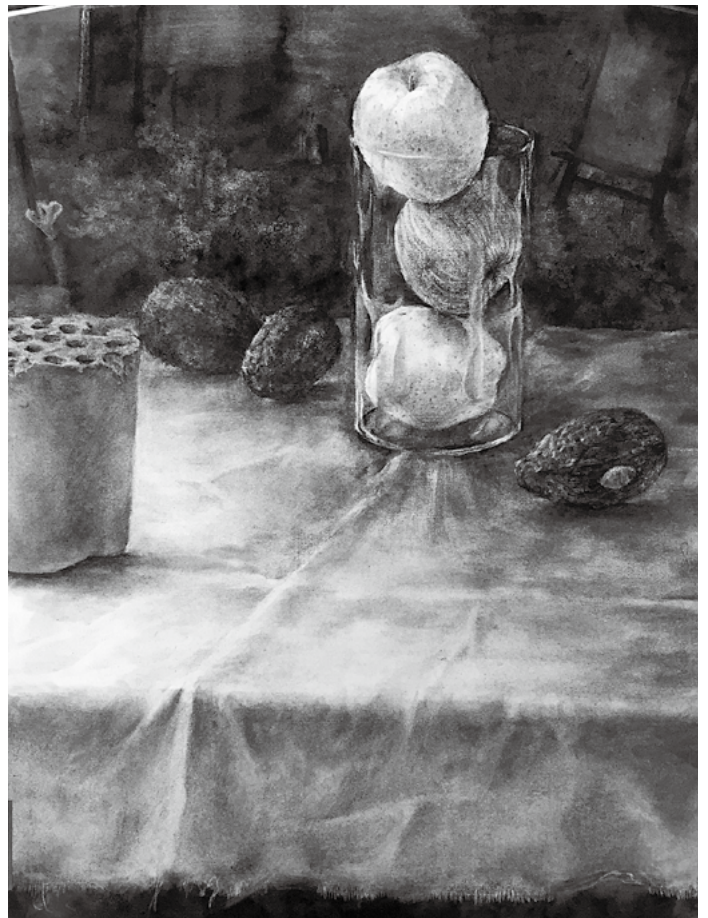
## 「美大生の素描」

落合 梨乃

私は素描と聞くと、美術大学を受験する為に通った美術予備校生(高校生)の頃を思い出す。美術予備校に通い始めた頃は、水彩や粘土、鉛筆・木炭デッサンを主に学んだ。毎日予備校に通い志望の油絵コースに別れた頃は、油絵と木炭デッサンがそれぞれ月に半分くらいの割合で組まれていた。素描の内容は静物、人物(着衣・ヌード)、石膏、空想や想像、自画像等、様々だった。私は素描をただ上手になりたい、周りに遅れをとりたくないという気持ちでひたすらに描いていたように思う。しかし、描いているうちにありのまま描くだけでなく、自分なりの表現を入れなくてはならないように感じていった。同時に私は自分自身がどのように描きたいのかわからなくなってしまった。今、思うと高校3年生となる春が1番木炭を操れ、魅力的な絵をつくれていたと思う。予備校の素描は精神的につらいこともあったが、木炭の粒子が紙にのり、独特な黒がつくる深さが美しく思い出に残っている。予備校で毎日のように描いていたこともあり、素描は受験の為に描くものだと捉えているところもあった。

その後、武蔵野美術大学に入学し、版画を専攻した。同期は予備校で油絵を描いていた者や日本画を描いていた者、予備校には通っていただけにあまり素描をしたことがない者もいた。大学1・2年生では必修の授業でヌードデッサンと静物デッサンを描く機会があった。しかし、3・4年生になると版画制作が中心となり、素描をする機会がなくなった。素描をしない期間が長くなると自分の描写力が落ちるのを感じ不安になる。描きたいと思いつながら描かず2年が経ってしまった。不安を消すため意識的にクロッキーの時間を作り、母校のクロッキー会に参加したり、遊びに行く時の待ち時間や友人にモデルになってもらいクロッキーをしていた。

私は絵を描く上で描写力は作家の表現したい内容や描き味によって重要だと考えている。私の作品は物語を生かす為に描写力が重要だと感じている。素描は描写力を上げるだけではなく、素描特有の美しい黒に触れたり自身の目を整えることができると思っている。現在の怠りを反省し、今が一番魅力的だといえるような素描を描けるよう努力していきたい。



▲落合梨乃「静物」2015年3月

## 「素描家というもの」

山田 礼二

ずいぶん昔になるが、本屋でドイツ人の画家、ホルスト・ヤンセンの素描集を見たときに、あまりの描写のすごさに驚き、しばらくはその作品群が頭から離れなかった思い出がある。高価すぎて購入できずにそれっきりになっていたが、このテーマをもらった時にあらためてネットで検索してみた。ヤンセンの描く内容が、死んだ動物や枯れた花、歪んだ人物、極度にデフォルメされた自画像などのマイナスイメージが多いためか、一般受けはしない。自らを「画狂人」と称する北斎を師(父)と仰ぎ、「描くこと」が「生きること」という北斎の生涯に惹かれて、数々の水彩、デッサン、銅版画などを残し、波乱に満ちた人生を送った。

「わたしは絵描きである。—正確に言えば、素描する絵描き、あるいは描く素描家である。出発の時点からわたしは素描家であり、毎日—どんなときでも—止むことなく、つまり、ものを書くときにも素描する。(後略)」

という彼の言葉に、普段の生活の中で鉛筆や鉛筆を持つ時間より、パソコンのマウスを持つ時間が多くなっている私としては、凡人の極みであることを思い知らされる。それでも自然を注意深く観察することぐらいは日常的にできる。画狂人とまでにはなれなくてもいいので、少しでも人の記憶に残る作品作りにつなげていければと思う。

今年の第56回主体展の特別展示として予定していた「素描のちから」展。会員の素描作品を持ち寄り、いつもの大作とは違った視点から会場づくりをする計画をしていた。このタイトルについて、「力」という



▲ホルスト・ヤンセン「ボベターニエン」1990年 ペン、水彩

漢字表記にするか「ちから」または「チカラ」というかな表記にするか事務局内でも意見が割れた。私は「ちから」というひらがなに、力強さだけではない底に秘めた粘り強さを感じたのでこれを推した。漢字か平仮名かだけでも受け取る印象が違って来るものなのである。

ましてや100人いれば100通りの素描の捉え方があり、一括りに論じることはできない。本誌の7人の会員それぞれが考える素描の思いを読んでみても、普段の作風とは違った一面を見ることができ、非常に興味深い誌面となっていると思う。

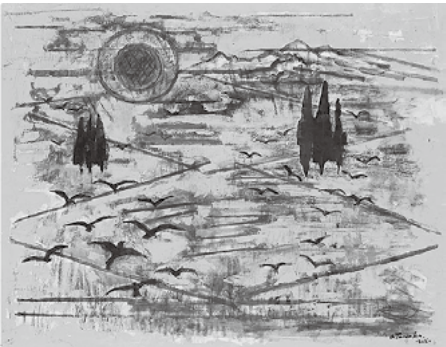
残念ながら今年は主体展自体が開催に至らなかったが、機関紙上でこのようなテーマで語り合うことで、今後の制作での各人の「ちから」になればありがたい。

## 惜別 『夏のスーツにカンカン帽』 田中朝庸さんを偲んで

岩井 啓二



田中朝庸 氏



「夕日に舞うカラス」F50 2018年第54回主体展

主体美術協会、創立会員の田中朝庸(朝吉)(1930年生)さんが、2020年2月13日に90歳で亡くなりました。自由美術家協会を退会し、主体美術協会創立に参加、1965年の第1回展より2018年の54回展まで出品されました。

群馬県の作家としては、まず山口薫が挙げられます。美術館で「惜しかったね、さっき山口薫が帰ったところ。」と先輩の絵描きから言われたことを思い出します。

田中朝庸さんは、同じく主体創立会員の松本忠義さん、豊田一男さんとともに山口薫とは群馬県展、グループ展などで親しく交流があったようです。私も主体に出品するようになってから、絵のことなどお話を伺いました。

田中さんは、群馬県の自然、榛名山、田園、家族像などを構成した作品を数多く発表しました。また雑誌などに主張や画論など書いていました。

「主体美術1996年号」に「初出品の頃からの問題」というタイトルで作家論など書いておられますので、長くなりますが引用します。

「一九七九年発刊・主体美術記念号に会員等の初出品の様子、作家としての立場が諸々語られて、各自の創作原点がわかる。初心に

帰ってという言葉の思い、読み返してみると現在の創作意欲の甘さを反省する日々です。絵画の本質とは、人間性に裏打ちされた造形表現であると思うが、近年は造形性よりも、アイデアやイラストレーション化にこだわり、あたかも自己表現の独自性を誇示し、軽薄な表現にたより、それを良とした風潮が目立つのはどうした事か。造形のもつ精神的な奥深さ、それを表現する構図・色彩・調子・主題は近代化された人間的なモチーフ。独特な表現で他の作風に害されないものであってほしい。…(後略)

多岐にわたる問題、造形性の追求と自己表現の独自性の追求、中央に居ることと地方に居ることなどを考えながら、主体展本展への参加と人間性に裏打ちされた造形表現を大事にした姿勢が分かります。

また1999年個展の「主張」と題する文章で「私達の生活は戦後という呪縛の中で生き、戦争や原爆への怒りを心の基盤として、戦後世代の画家として作品を発表してきた」と書いておられます。主体本展の審査では、最前列の中央に座って、夏のスーツに帽子を着用して、審査の議論に参加していたことを思い出します。

ご冥福をお祈りいたします。

## 惜別 『昭和一桁の画家』 植田寛治さんを偲んで

榎本香菜子



植田寛治 氏



「車両はつくし野駅を発進」F120 2019年第55回記念主体展

高校3年間、故・森秀男のアトリエに入りし、ウエダカンジという名前を時々耳にしていた。それから3年後、思うところありアメリカで外交官宅のメイドを2年弱やっていた。当時、朝日特派員だった筑紫哲也氏、後にカミソリ検事と言われた堀田力氏、FBI研修に来ていた平沢勝栄氏など皆若く、よく遊びに来たものだった。ゲストを迎える居間の壁に1枚の油絵が掛けてあった。それが植田さんの絵だったのである。全く知らずに渡米し、偶然にも、私が仕えていたN氏は麻布高校時代からの植田さんの大親友だった。麻布では共に美術部、俺たちは一生結婚しないぞ、と独身連盟を組んでいたと聞く。入院中も、亡くなった時もいち早く駆け付けたのはN氏だった。植田さんと顔合わせれば「Nさんとね、…」と切り出され、N氏と話していれば「ウエダ描いているらいいよ」と情報が入ったものだ。

植田さんには、色々な顔があった。総会で乱暴な言葉を発したり、審査中にキレて途中退場もした。しかし、ひげをかすことは決して無かったが博識、勉強家ぶりが見え隠れする。会場研究会でも、いたって丁寧、出品者への講評の言葉は美しく紳士だった。故・中川美智夫さんは最愛の飲み友達。その振る舞いは師を仰ぐが如く。

1959~1963年までパリ国立美術学校に留学。先生からは教室から出ていけ、と侮辱され罵倒される毎日。しかし最後には教室中でオレの話についてこられるのは君だけだ、とまで言わせしめた。異国で孤独に耐え、歯を食いしばりさぞ苦しい日々だったことだろう。帰国し結婚。二人のお子さんにも恵まれ1967年主体美術会員になるも1970~1984まで、出入国あったにせよ殆どフランス滞在。帰国後間もなかった頃の主体レセプションでのこと、最後の一本締め「まるで○○ザみたいじゃない」と私の隣で呟いていたことが忘れられない。

1996年主体のパンフに「盲言多謝」という文を寄せている。ここに植田さんの作家精神を見る。公募展の矛盾を突きつつ、応募者にはただ一つ、作家としてのプライドと責任を、作家は孤であります、と語る。許せない根性人間とは同じ船に乗ってたくはない、勝海舟のエピソードまで載せている。

植田さんの葬儀、いつまでも心に残る。控え室に展示された絵画、アトリエキャビネット、棺には故人の愛用した筆を皆で入れた。いかなる時も作家の魂を失わなかった。その人が本当に信じているものだけが他者の心を動かし伝わるのだ、と強く実感した。

植田さん、天国でも描いていますか？ 中川さんと、美味しいお酒を飲んでますか？

# アトリエ訪問 vol.6

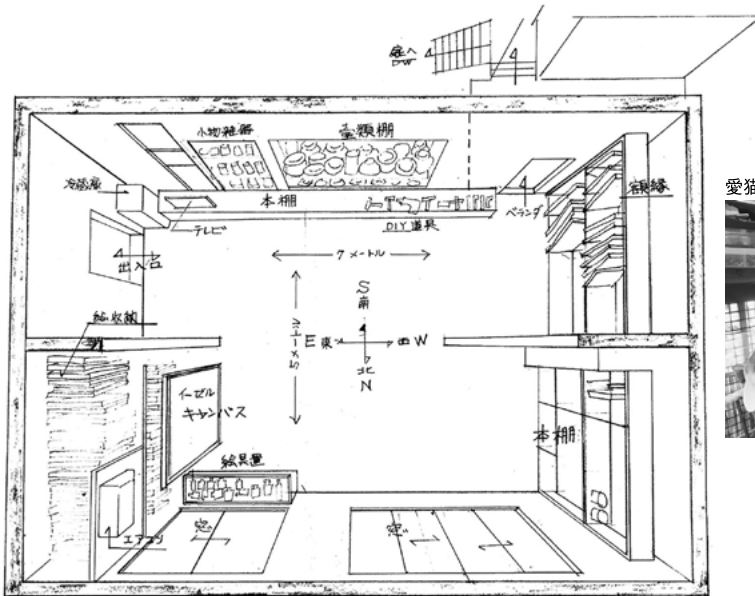
## 『有馬久二さん』

— 国立のアトリエを訪ねて

東京都国立市

取材・文／齋藤典久

写真・構成／藤田俊哉



アトリエ図作成／有馬久二氏

愛猫モモちゃん



家にあった身近なモチーフを描く。特に自分のルーツでもある鹿児島島の能野焼(よきのやき:種子島焼きとも呼ばれる、暗褐色を基調の素朴で重厚な幻の銘器)の壺から描き始めたそうだ。

「油絵科や彫刻科と違って裸のデッサンを数枚しか描いて来てないので、人物の代わりにデッサン力をつけるために壺を描いてた。壺の作品20号を2枚初めて第10回主体展に出品して、次の年も入選し、その後本格的に絵に取り込んだ。主体展で知り合った出品者とグループ展を組んだ、その時に大野五郎さんがよくしてくれた。銀座の『ピルゼン』(\*ビアホール)に行くと主体の会員がいつも誰彼が来ていて、あの頃は楽しかったな」

### ■2011年(46回展)からは絵が変わりましたよね?

「壺しか描けないのが嫌で、壺を描かなくなった。それから大作を描くようになって構図の一部として壺を使うことにしたんだ」

### ■それで、作品の構成がより複雑にシニールに近づいたんですね。ところで絵を描く時間は?

「僕は朝型で早朝5時から午前中、午後はゆっくりしてるよ」

### ■好きな音楽は?

「ショパンが好きで、朝起きたらショパンを聞いて描き始める」

### ■好きな画家は誰ですか?

「マグリット、原撫松、あとスペインリアリズムの磯江毅だね」

### ■有馬さんにとって制作の上で大事にしていることは?

「そんな難しいことは考えてないんだよ。でもね何日も何時間もモチーフを見て描き続けていると、一瞬フワッと画面から何か浮き上がってくる瞬間があるんだ、滅多にあることじゃないけど、その瞬間に出会えたらいいね」

### ■ちなみに趣味は何ですか?

「前はよく川釣りに行ってたけど、今はハイキングとソフトボールと、モモちゃん(ネコちゃん)とおしゃべりね」

### ■最後に今のテーマは何ですか?

「コロナに罹らず生き抜くことね」

6月20日、雨の切れ間の東京都国立市。アトリエ訪問のため有馬邸へ伺った。艶消しの黒い玄関ドアには白く"Arima"と書いてある。有馬さんに「キマッてますね」と言うと「お父っあんの絵のサインなんだよ、僕が起こしたんだ」ご尊父は画家で教員をしておられた。庭の片隅には工具や木工の材料が並ぶ作業場。「僕は木工が好きだからここでやってるんだ」家に上がる前から物作りを楽しんでいる雰囲気は伝わってくる。

懐かしい木製の階段を上がると、天井まで3mはあるアトリエが広がる。北側の窓からは柔らかな光が、敷き詰められた絨毯の柄を静かに浮かび上がらせている。両端の壁に描きかけの絵が立てかけられ、窓の下には画材と作品に度々登場するモチーフが整然と並んでいる。

### ■絵を描くきっかけを教えてください。

「僕は美大のデザイン科に進んだんだ、木工が好きだったから卒業し就職したのは、その頃花形だったディスプレイの会社だった。万博の頃で経済が90度のうなぎ上り状態、とにかく忙しく毎日徹夜が続いた。そのため体重が45kgまで減り、このままでは死ぬよとドクターストップ。会社を辞めた。なので27才から本格的に絵を始めたんだ。それまで絵を描いたことがなかったんだ」

### ■お父さん画家だったから、教わってなかったんですか?

「一度もなかったんだな。でも中学一年からキャンパス貼りや筆洗い、パレット掃除をしていたよ。教師の仕事が終わって夜描くから僕の仕事は朝やるの。お父っあんは人を乗せるのがうまかったんだよ、僕も褒めてもらいたくてね、アハイ」

### ■有馬さんのスタートは内弟子みたいな事ですね(笑)

「そうそう、その気にさせるの上手かった。」

教わらなかつたと言っても、日曜日にはアトリエで父の教室があり、その教え方、手の入れ方を後ろから見ていて学んだと言う。そこで有馬さんはモノを見て描く表現の可能性に惹きつけられていった時間を持てた。

「風景画や抽象画もいいなと思うけど、やっぱり僕はものを見て描く静物画なんだな。ものがあってものを描く、性格だよな」



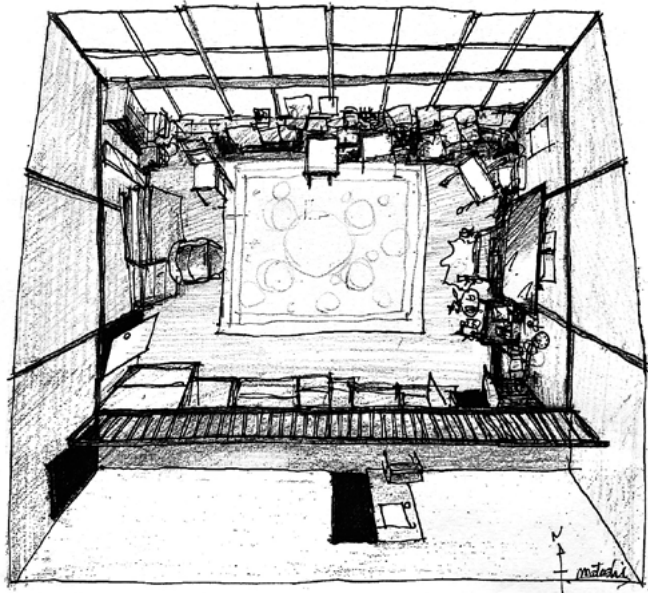
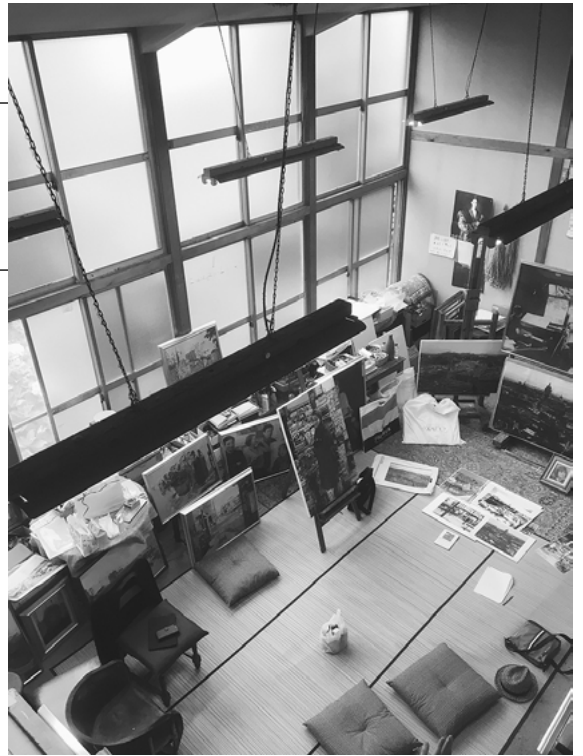
# アトリエ訪問 vol.7

## 『故・植田寛治さん』 —遺されたアトリエにて—

東京都大田区

取材・文／山崎 弘

写真・構成／藤田俊哉



アトリエ図作成／松永 基氏

告別式の時に飾られていた植田さんの作品を、主体美術神奈川作家展にお借りした。今回はコロナの影響で中止となってしまったが、その返却の為初めてお宅に伺う。アトリエ中心の家に、画家・植田寛治の絵に対する強い意気込みを感じた。

アトリエ訪問をご長男の多帆さんが快諾くださり、6月21日(日)に藤田俊哉さんと共に伺う。24畳(5.4m×7.2m)の大スパンの柱の無い空間、二階まで吹き抜けて北向きを全面開口にした大空間には圧倒される。二階は東西方向に廊下が通り、アトリエ全体を俯瞰できるようになっている。

無垢板の床に絨毯が敷かれ、重ねて置かれている作品群、使い込まれたイーゼル、アトリエキャビネット、机、本棚、破れかけた革張りの椅子、画材、モチーフなどが、掛けられている絵と響きあっている。

制作の為に使われた写真は大切に整理されていて、ボードに貼られた古き良き時代のヨーロッパ(特にパリ)の風景写真の拡大コピーは、それだけで絵になっていて美しい。それらには分割線が引かれていない。数点の拡大コピーとそれを基に制作した絵を並べて見る。描かれた作品は、構構力と空間の処理が的確なデッサン、洒落なタッチなどによって張りのある画面になっている。

隅の机には、漱石・芭蕉・蕪村・勝海舟に関する本などが無造作に山積みされており、その中にセザンヌの画集が何冊か見える。また、何かしらの文庫本を毎日お風呂に持ち込んで、長時間半身浴をしながら読んでいたことを息子さんから聞いた。

彼が結婚するまでの数年間の父との同居生活の中で、制作中の絵について話してくれたり、どう描いていいのかわからないと聞いてくることもあったそうだ。また、描いている時、お祭りのお囃子がうるさいとテレビの音量を最大限に上げて対抗し、近所から苦情が来て多帆さんが謝りに回った事もあったという。

イーゼルに向かっての壁には、自らを戒めるために書かれた紙が何枚か貼ってある。

自分の絵を本気で追い求めて描いている植田さんの姿が見えてくるようだ。2時間余りのアトリエ訪問ではあったが、植田さんの絵に対する情熱、姿勢、生きざまを肌で感じることができ、貴重なひとときであった。襟を正される思いでアトリエを後にした。



壁に貼ってあったフランス語のメモ書き



ご子息の植田多帆さん

注意と反省  
不注意と無反省  
注意力と反省力  
それが描き込むという事

◎一寸した手抜きが  
一番大切なムーブメントを  
壊していることがある  
注意!

Ne bricoler pas la peinture!  
《絵を日曜大工にするな》と。

Le Point Culminant  
明暗より大切だ

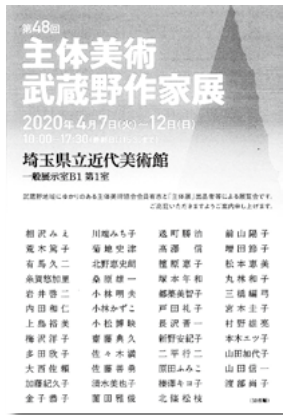
# 『2020年春 コロナ禍の美術展』

皆さんご存知のとおり、今春は未曾有のコロナ禍の吹き荒れる中、日本中の美術館やギャラリーでの展覧会イベントも軒並み中止となりました。我々主体美術のメンバーたちの地域展もすべて中止。そんな歴史的な災禍の状況を、日本各地からレポートしてもらいます。

各地の美術展から  
**武蔵野作家展**

## 武蔵野展の運命は…

桑原 雄一 (東京都)



今春、机の上には書類の山が出来ていました。すべて第48回主体美術武蔵野作家展(以下武蔵野展)の関連書類です。会期は4月7日から12日、会場は埼玉県立近代美術館、まさに4月7日の緊急事態宣言発出の時です。

出品者が減少している武蔵野展、地域を広げて出品をお願いした結果、昨年に近い47名に達し、ひと安心。出品者が確定したので案内状、ポスターのデザイン等スタートしました。完成した若草色の案内状の発送を終わり、搬入日に必要な書類も殆ど完成したところ、

にわかに、新型コロナウイルス感染症が国内でも広がり始めました。当初は「大丈夫だろう」と考えていましたが、事態は日増しに深刻度を増して、まさかと思っていた武蔵野展の中止が現実味を帯びてきました。

武蔵野展では絶対に感染者を出すことは出来ないし、展示作業ができる人数が集まるのか、美術館から使用料が返金されるのかも心配でした。一方、出品予定者からは健康上の理由で不出品の申し出がありました。展覧会の安全、運営に責任がある事務局としては、中止すべきで

はないかと考えるようになりました。何人かの出品予定者の意見を聴くと概ね「中止、止むなし」の意見でした。そんな中、美術館は3月15日までの臨時休館を発表(2月26日)、その後、小刻みに休館は延長され、先行きが全く読めない状況になりました。

【以下、当時の美術館とのやり取り(要約)】

**桑原**：コロナの影響で中止を考えています。その場合、使用料は返金されますか？

**美術館**：主催者側の都合による中止であれば、返金できません。今のところ、3月15日以降は再開のつもりですが休館延長の可能性もあります。

**桑原**：搬入日当日に休館が決まることもありますか？

**美術館**：先が読めない状態なので、なんともいえません。

**桑原**：展覧会を中止するのは埼玉県の自粛要請に協力するものです。返金を検討して下さい。

**美術館**：状況は理解できるので、県と相談します。

…………… 翌日 ……………

**美術館**：コロナ禍対応での中止であれば、例外として返金することにします。

**桑原**：大変に助かります。迅速な対応に深謝。

その後、3月末には4月14日まで休館延長される旨の連絡があり、最終的には5月初旬まで延長されました。結局武蔵野展は開催できない運命にあったのです。次期事務局が決まった今、机の上の書類の山は随分低くなりました。

各地の美術展から  
**神奈川作家展**

## 緊急事態宣言の下で

黒川 洋 (神奈川県)

私の住んでいる場所は、横浜市のいしばん南、歌川広重の金沢八景でも知られる金沢区です。金沢区から鎌倉へのハイキングコースもあり自然には比較的恵まれています。

緊急事態宣言の下で外出自粛の時期には、運動不足解消のためマスクをして散歩をする人が増えて、今まではほとんど空いていた公園のベンチも必ず座っている人が居るという感じでした。毎年、潮干狩りで賑わう野島公園は海岸への立入りが禁止となり、1週間前までは潮干狩りで賑わっていた海岸にも柵が張り巡らされました。春の日の人影のない海岸は不思議な静けさに包まれていました。海水がいつもより澄んで見えたのは気のせいだったのでしょうか。対岸の「八景島シーパラダイス」や隣にある「海の公園」はひっそりとしていました。学校も休みになったせいか、住宅街の公園では子供たちが遊ぶ姿がよく見られました。遊ぶ子供の声聞けば、我が身さえこそゆるがるれ」とおり、元気な子供達の声を聞くのはなかなかよいものでした。

神奈川では、3月31日(火)~4月6日(月)の日程で第52回主体美術神奈川作家展(於、横浜市民ギャラリー)の開催を予定していましたが、コロナウイルス感染拡大の状況下のため中止としました。3月10日(火)に中止を決定しましたが、当初は、横浜市民ギャラリーは開館を継続するので、展覧会の開催の可否は主催者の判断に委ねるという状況でしたし、「一ヶ月も経てば通常通りの生活に戻れるのではないか」とギリギリまで迷いました。最終的には、東日本大震災の時には返金されな

かったギャラリー使用料が、今回は返金されることとなったことは幸いでした。展覧会の反省会として予約をしていた市従会館も、会議室のキャンセルについても返金されました。

既に、来年の主体美術神奈川作家展の会場は確保できていますが、秋にはその準備が始まります。どのようなカタチで開催することになるのか、暫くは世の中の動きを見守る日々が続きそうです。

7月5日(日)現在の横浜界隈の美術館の状況は下記のとおりです。

神奈川県立の施設は、コロナウイルスの感染が始まった当初は8月末まで閉館としていましたが、緊急事態宣言が繰り上げ解除となって以降、開館時期が繰り上がったようです。

- ・横浜市民ギャラリー／7月13日までの展覧会・講座等はすべて中止
  - ・神奈川県立近代美術館葉山館／7月31日から次回展開催
  - ・神奈川県立近代美術館鎌倉別館／6月9日から開館
  - ・神奈川県民ホール／神奈川県美術展中止
  - ・横浜美術館／7月17日(金)ヨコハマトリエンナーレ2020から開催
  - ・横須賀美術館／6月20日(土)から開館
  - ・平塚市美術館／6月16日(火)から開館
- ~コロナウイルス感染の日も早い終息を祈りつつ~

**第52回**  
**主体美術神奈川作家展**  
**《横浜市民ギャラリー》**

会期 2020年3月31日(火)~4月6日(月)  
時間 AM10:00~PM6:00  
(休館日)3月10日(火) 3月17日(火)

この展、第52回主体美術神奈川作家展を開催いたします。ご参加とは程早急です。ご参加者様へはご案内申し上げます。なお、3月31日(火)午後1時から、グリーンベイホテルにて、ささやかなオープンパーティーを行います。お気遣いお願ひ下さい。

船田 和博	石田 徹哉	井上 順也	井上 雅仁
美本 創夫	羽部 悠子	橋田 義子	内田結美子
根本香葉子	滝藤 明美	緒方 克也	沖 弘康
河西 恭子	船本喜久子	金沢 綾子	北村 奈茂
黒川 洋	佐藤 良成	佐野 未知	鈴木 進
武田 和夫	田中未加津	坪澤 陽子	丹波 宏之
藤橋 守	坪井 健一	手塚 國彦	紙野 芳晴
長崎 幸子	成澤 広高	中嶋 敏	中嶋 芳雄
中村 博子	藤川 典子	菅 幸治	宇田 誠
藤原 アツ	藤原美枝子	松元美香子	森田 茂樹
森田 七智	山崎 清子	山崎 弘	結城 智子

事務局 〒226-0027 横浜市民ギャラリー館5-101 電話 045-546-8310 黒川 洋

各地の  
美術展から  
中部作家展

## 『主体中部作家展』中止報告

水谷 幸子 (愛知県)

今春は新型コロナウイルス感染拡大のため全国で美術館は閉館、イベントは中止、緊急事態宣言の状況は日々変動しています。中部の美術館・博物館は5月10日まで閉館、それからまた5月31日まで延長になりました。5月14日時点で絵画に関する団体で中止になっているところは、約23団体(5月14日～10月27日、地元中部の団体も含む)あります。

第54回主体美術中部作家展も愛知県美術8階ギャラリーで3月10日(火)～3月15日(日)まで開催予定でしたが、コロナウィルスの影響でギリギリまで迷いました。会員一人ひとりの意見を聞き、いろいろな面で不安が大きいとの意見が多くあり残念ながら中止としました。同時期開催された団体に聞きましたが、入場者は少なかったそうです。市内のギャラリーなども予定されていた展覧会も延期、中止が多かったと聞きました。

緊急事態宣言前ですが、中部の会員4人の個展、中島佳子さん(大阪市歴史民俗資料館)は残念ですが延期となりました。オノ・ミチ・ヒロさんは1月29日～2月2日(三重画廊)、水野博子さんが豊田市美術館で3月31日～4月5日、永井直子さんは刈谷市美術館で3月4日～8日まで個展をされ、大作が並び大変感動し刺激を受けました。中部の者としては本当に心強く思いました。

これからはコロナウィルスと共存して新しい生活様式を作っていくという国の方針が出ました。展覧会も審査方法など今まで通りでなく新し

い方向に転換できたらと思いますが、何も案は浮かびません。東京事務局の方々には大変お世話をおかけします。

いつまでこんな状況が続くのか、6月になって状況は変わりだいが落ち着いた感じですが、元の生活に戻れることを願うばかりです。早く皆様の作品が拝見したいです。

各地の  
美術展から  
関西作家展関西作家展中止と  
市内の状況

岡本 裕介 (京都府)

関西作家展は1月下旬頃から、出品者を募り準備を始めましたがコロナウィルス感染拡大を懸念して不出品という人は、若干名でした。2月上旬の段階では私自身全く危機感がありませんでした。淡々と準備を進める中、主体の他の地域展の中止の案内が届きます。

関西展の中止を決定したのは3月下旬でした。当時、感染状況が厳しかった兵庫県在住の会員から中止の意見が多く出ました。すでに、案内状の印刷を発注していましたが会員全員に中止を打診し決定しました。緊急事態宣言が発令されて以降、京都市美術館、原田の森ギャラリーや京都府立文化芸術会館は閉鎖。市内の画廊などからグループ展や個展の中止の連絡が相次ぎました。

京都市内の状況は、葵祭も神事だけは行われたようですが、齋王代の行列は中止。祇園祭も本年は山鉾巡行などは中止されるようです。連休期間中も京都では観光客はほぼゼロ。外国からの観光客も3月に入ってから市中で見かけなくなりました。学校の休校、飲食店などの店舗の休業、不要不急の外出の自粛などの要請が自治体からなされる中、地域では廃業する個人商店や倒産なども数多く見られます。

春闘に関するイベントは殆どありませんでしたが、解雇や不払い賃金の発生など雇用に関する労働相談は多発しているようです。

フリーランスで教室などを経営している仲間や、観光産業で働いている人などは収入がゼロとなり制作どころではない人も出ています。大変厳しい生活状況に置かれている仲間が出ており、今後の展覧会の開催に大きな不安を感じています。

6月に入り、京都市美術館や京都府立文化芸術会館、原田の森ギャラリーの閉館は解除されたようですが、6月末の時点で、団体展やグループ展はほぼ中止の状態が続いています。京都市美術館では、企画展のみの開催を再開している様ですが予約制で入場制限がなされているようです。一日も早い終息を祈りつつ～



2020年5月4日(月) 連休中、人影の無い朝の銀座

ゴールデンウィーク中の5月4日(月・祝)緊急事態宣言発令中の都内を車で走ってみた。渋谷区代官山、いつもは賑わうカフェには5月末日までの休業の貼り紙がある。午前9時30分の銀座4丁目、和光の交差点はご覧のとおり車も人影もまばら…。行き交う車は無いのに信号機だけが点滅している、こんな銀座は見たことが無い。

経済活動のストップは怖い。ゴースタウンという言葉が頭をよぎった。(F)

展覧会記録

2020年1月～2020年8月末

- 燐々展**  
(有馬久二、黒川洋、佐藤善勇、手塚國彦)  
1月6日～1月12日  
銀座アートホール1F(銀座8)
- 山口長男\*野見山暁治と実専展**  
(長沢晋一他)  
1月6日～1月12日  
銀座ギャラリームサシ(銀座1)
- 藤田俊哉個展「花・色・形」**  
1月12日～2月2日  
d-labo静岡(静岡市)
- 第5回絵画・平面の未来展**  
(福田和幸他)  
1月13日～1月18日  
ギャラリー一眺(銀座6)
- 新春ガラス絵展**(浅野修、中城芳裕、中村輝行、山本靖久他)  
1月13日～1月18日  
ギャラリー サムホール(銀座7)
- かみのしごと**(山本靖久他)  
1月13日～1月19日  
あかね画廊(銀座4)
- PREMIER STAGE展**  
(柏木喜久子、高橋玲奈他)  
1月15日～1月23日  
ギャラリーステージワン(銀座1)
- 浅野修(虚と実)展**  
1月15日～1月25日  
銀座Ksギャラリー(銀座1)
- 主体展秀作家(2019)と会員小品展**  
1月16日～1月27日  
ヒルトピアアートスクエア  
(新宿/ヒルトン東京B1)
- 第11回現代茨城作家美術展**  
(福田玲子他)  
1月18日～2月9日  
茨城県近代美術館(水戸市)
- フェノメナ20最終展**(柏木喜久子他)  
1月20日～2月1日  
始弘画廊(南青山)
- 長沢晋一展**  
1月27日～2月1日  
あらかわ画廊(銀座1)
- M-art'79展**(山崎弘他)  
1月27日～2月1日  
画廊宮坂(銀座7)
- オノ・ミチ・ヒロ展**  
1月29日～2月2日  
三重画廊(三重県津市)
- 北澤わかー大地の譜一**  
2月1日～2月25日  
河鍋暁斎記念美術館(埼玉県蕨市)
- サロンDU展**(齋藤典久他)  
2月2日～2月23日  
ギャラリーユニコン(川崎市)
- 菌田雅俊展**  
2月10日～2月15日  
ギャラリー・オカベ(銀座4)
- 第17回冬期ミニチュア100人展**  
(伊藤明美、柴田かよ子、水谷幸子、水野博子他)  
2月11日～2月23日  
ギャラリー名芳洞(名古屋)
- 日本・2020展**(柏木喜久子他)  
2月17日～2月22日  
ギャラリー一眺(銀座6)
- かみのしごとII**(井上樹里他)  
3月2日～3月8日  
あかね画廊(銀座4)
- 石井公彦遺作展**  
3月2日～3月9日  
d-lab gallery(入間市)
- 第7回Femmes展**(井上樹里他)  
3月2日～3月12日  
高輪画廊(銀座8)
- 永井直子展**  
3月4日～3月8日  
刈谷市美術館第1展示室(刈谷市)
- 2020ミニミニ100選展**  
(柏木喜久子、長沢晋一他)  
3月9日～3月14日  
ギャラリー一眺(銀座6)
- 視点(鼎の眼)**(山本靖久他)  
3月9日～3月15日  
あかね画廊(銀座4)
- 第10回輪展**(長沢晋一他)  
3月16日～3月21日  
銀座Ksギャラリー(銀座1)
- 吉崎幹雄展**  
3月17日～3月22日  
原田の森ギャラリー東館1F
- 第3回弥生の空に**  
(井上樹里、山本靖久他)  
3月23日～4月4日  
始弘画廊(南青山5)
- 大口満絵画展**(油絵・水彩)  
3月28日～4月5日  
大嶋画廊2階ギャラリー(新潟県上越市)
- 12名によるArt Exhibition**  
(齋藤典久他)  
3月29日～4月4日  
ゆう画廊(銀座3)
- 水野博子自選展**  
3月31日～4月5日  
豊田美術館市民ギャラリー(豊田市)
- 水村喜一郎展**  
4月1日～11月30日  
水村喜一郎美術館(長野県東御市)
- 平田誠作品展**  
4月6日～4月12日  
画廊 楽 I(横浜市)

- 11の指標展**(長沢晋一他)  
6月8日～6月13日  
画廊るたん(銀座6)
- 「フォルム⇄イメージ」ーかたちのむこうに見えるもの…。**(前川アキ他)  
6月13日～6月29日  
Gallery Retara(札幌市)
- 絵筆はコロナウイルスに負けじ展**  
(續橋守他)  
6月15日～6月20日  
ギャラリー一眺(銀座6)
- 第27回心に響く小品展一今、表現者として一**(藤田俊哉他)  
6月23日～7月5日  
ギャラリーヒルゲート(京都)
- 小林宏至油絵展**  
6月25日～7月1日  
渋谷東急本店8階美術画廊(渋谷区)
- 「COVID-19・アーティストの視点」展**  
(柏木喜久子他)  
7月6日～7月18日  
ギャラリー志門(銀座6)
- 高輪画廊開館30周年記念展20×20**  
(井上樹里、小林宏至他)  
7月6日～7月25日  
高輪画廊(銀座8)
- 茨城の美術セレクション**(福田玲子他)  
7月7日～7月19日  
茨城県つくば美術館(つくば市)
- 小菅光夫版画とガラス絵展**  
7月17日～7月24日  
白岡工芸館(埼玉県白岡市)
- GOCHI展**(長沢晋一他)  
7月20日～7月25日  
ギャラリーセイコウドウ(銀座1)
- 坐・琳派展 陸**(水戸部千鶴他)  
7月27日～8月2日  
画廊楽1(横浜市)
- 柿崎寛油絵展**  
8月5日～8月11日  
名古屋栄三越7階美術画廊(名古屋市)
- 永井美智子個展**  
8月6日～8月11日  
道新ギャラリーA室(札幌市)
- 第35回日本の海洋画展**  
(佐藤善勇、手塚國彦、中村輝行他)  
8月6日～8月11日  
東京芸術劇場5F展示ギャラリー  
(豊島区)

- 竹越夏子展**  
8月6日～8月13日  
MEDEL GALLERY SHU(千代田区)
- Exhibition IKIMONO 2020**  
(オノ・ミチ・ヒロ他)  
8月8日～8月14日  
ギャラリーMOS(三重県松坂市)
- ジャコビニオウタムフェスタ**  
(長沢晋一他)  
8月18日～8月29日  
あらかわ画廊(銀座1)

以下コロナ禍により中止(延期)になった展覧会

- 第54回主体美術中部作家展**  
3月10日～3月15日(中止)  
愛知県美術館ギャラリー(E-F室)
- Klt.A・水戸麻記子二人展「怪物が見ていた…」**  
3月15日～3月22日(中止)  
Hue Universal Gallery(札幌)
- サークルトーン展**  
(鳩貝悦子他)  
3月16日～3月21日(中止)  
ギャラリー一眺(銀座6)
- 第52回主体美術神奈川作家展**  
3月31日～4月6日(中止)  
横浜市民ギャラリー
- 中島佳子展**  
4月4日～4月26日(延期)  
大府市歴史民俗資料館(愛知県大府市)
- 第48回主体美術武蔵野作家展**  
4月7日～4月12日(中止)  
埼玉県立近代美術館
- 松本恵美 個展**  
4月13日～4月18日(無期延期)  
ギャラリーセイコウドウ(銀座1)
- 鳩貝悦子展**  
一Invisible2020一  
4月13日～4月18日(中止)  
ギャラリー・オカベ(銀座4)
- 榎本香菜子展**  
4月27日～5月2日(延期)  
→11月30日～12月5日  
シロタ画廊(銀座7)

※展覧会案内状を機関紙担当(山田)、ホームページ担当(長沢)にお送りください。(会員・出品者問わず掲載いたします)

編集後記

■2020年の幕開けは何を置いても『新型コロナウイルス感染症』。春の展覧会が軒並み『中止』になるのはわかって、秋以降の展覧会にまで影響が及ぶとは思ってもみませんでした。それ以前に機関紙107号は早々と『素描のちから』特集が決まっており、本展の特別展示に連動するかたちで編集も準備を進めたのです。残念ながら『主体展』そのものは今年も開催見送りとなりましたが、結果として機関紙の特集はこうして皆さんにお届けすることができました。各作家さまさまざまな『素描論』、これも主体展の持つ独自のメディア、発信力の強みかと自負しております。(藤田俊哉)

■新型コロナウイルスによる感染状況は、ようやく第二波の山は超えつつあるという発表があったが、経済活動は惨憺たるもので、今後生活面で大変な時期を迎えると予測されている。感染者に対する差別や偏見は、東日本大震災以降、東北の人たちが被ってきた状況に似ているものがあり、また同じことが繰り返されていると感じる。ネットを通じてデマが広がっていくこの状況をなんとかできないものだろうか。私たち美術家はこの時代にどう向き合い、何をなすべきなのか。そのことばかり考える日々が続いている。(山田礼二)

2020年2月に発行しました機関紙106号に誤記がありましたので、この場でお詫びして訂正いたします。

- 6ページ、3列目上から6行目 土方明治→土方明司
- 7ページ、2列目上から22行目 アメリカ赤痢→アメリカ赤痢

ホームページ掲載の機関紙は訂正済みとなっております。ご一読ください。

- 2020年度事務局体制**
- 責任者/福田玲子 ■会計/齋藤典久
  - 展覧会/結城智子・菌田雅俊 ■研究/榎本香菜子・井上樹里
  - 広報/【図録・出版】桑原雄一・久我英輔 【機関紙】藤田俊哉・山田礼二
  - 【発送】柿崎 寛 【広告】黒川 洋
  - ◆巡回展/名古屋:水谷幸子 京都:森 慎司 ◆ホームページ/長沢晋一